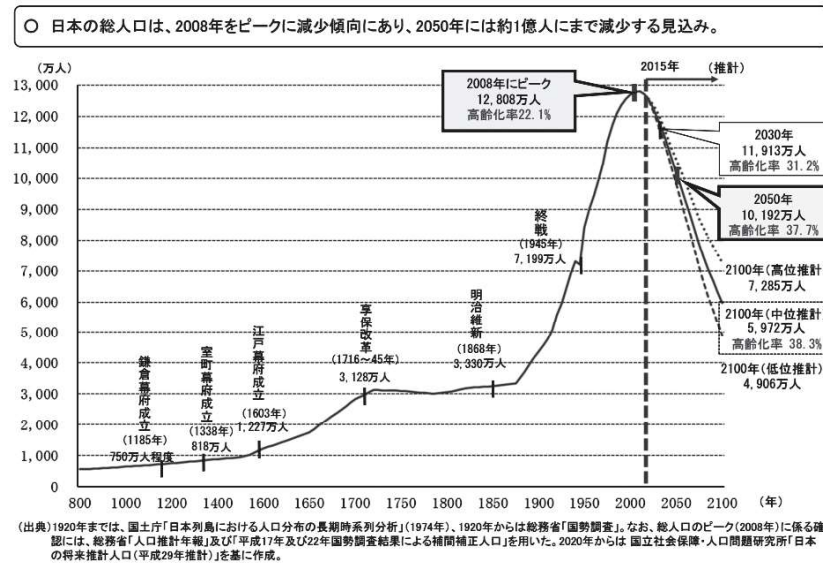


対談：慣性から知性への撤退

近代から降りる

堀田新五郎

「対談：慣性から知性への撤退」については、大ぶろしきを広げマクロな観点から論じて欲しいとの要請が、総合司会(白岩英樹)からあった。ということで、デカイ話をする。我々はいま、日本史の中でいかなる時代を生きているのか？ これを考えることで、「近代から降りる」ことについて論じたい。簡潔に言えば、我々はいま、明治維新・戦後改革にならぶ大きな転換期に立っているのである。「日本の総人口の長期的推移」を確認しよう(国土交通省「国土の長期展望 中間とりまとめ」令和2年10月における「参考資料」より)。



維新の年3,300万人だった総人口は、近代化によって爆発的に増加し、2008年12,808万人でピークを迎えた。その後は、増加したのと同じだけの猛スピードで、増えた分の人口が失われるらしい。ジェットコースターが勾配のきつい放物線を駆け上がり、ピークを越え、真逆さまに落ちていく。落下が始まった瞬間のふわっとした無重力、これが現在の立ち位置ではなからうか。人口動態は他の未来予測とは異なり、ほぼ正確に妥当する。ならば「未来」について考え、備えるべきは「いま」である。今後落下にともなうぐんぐんGが高まり、人々が絶叫をはじめると、身動きのとれない社会がやってこないとも限らない。そうならないために、重力が希薄化している「いま」、「未来」を考え、備えるのである。どんなふうか？

重さと軽さについて考えよう。明治における近代化の核心は国民=国家(nation=state)を構築することにあった。一つの民族が、一つの国民として、一つの主権国家を構成する、これが国民国家の理念である。よく指摘されるように、かなりフィクショナルで暴力的な物語ではあるが、しかし人々の国民化は、確かに身分制からの解放ではあった。その意味では、軽み・浮力が与えられたのである。家や土地に縛られることなく、誰もが「博士」や「大臣」への立身出世を可能とする。重みは「宿命」や「閉塞」や「束縛」と、軽みは「偶然」や「開放」や「自由」と結びつくのである。だがもちろん、解き放たれた個人(というか男性)も、最終的には国家によって回収されることとなる。帝国臣民はみな、「国民的課題」を達成すべく奉仕しなければならない。実業家も労働者も軍人も、日々の奮闘努力は「富国強兵」「殖産興業」「条約改正」の実現を期してのものである。国民全員が一丸となって、坂の上の雲(=世界の一等国)を目指して登っていった。これは楽しくもあるが、重くもあった時代であろう。「一元化」と「回収」は、重みをもたらすからである。

さて、「国民的課題」はその後「大東亜共栄圏」「聖戦完遂」へと至り、その帰結は「一億総玉砕」から「一億総懺悔」となっていった。これにより第2の転換期、戦後改革が始まる。ここでもまずは、浮力の方を指摘すべきであろう。新憲法は、「すべて国民は、個人として尊重される」(第13条)と明記する。老若男女みな、単純に一個人として尊重され、それぞれが自由に考え、

信じ、表現してよいこととなる(第19条、第20条、第21条)。この圧倒的な開放と多元化が、基本的人権の尊重にほかならない。「焼け跡の明るさ」「敗戦を抱きしめて」と語られるゆえんであろう。重力が軽くなったのである。では、こうした戦後改革とともに、「国民的課題」への邁進という現象は消え去ったのだろうか。否、まったくもって否。解き放たれた個人たちは、やはり一丸となって国民的課題、すなわち「戦後復興」「所得倍増」「高度経済成長」へと突き進み、ふたたび坂の上の雲(=経済大国)を目指していったのである。「東京オリンピック(64年)」を成功させ、復興した美しい日本を世界に見せるため、国をあげてインフラ整備(新幹線・首都高速etc.)と清掃活動に邁進した。「進め、一億ゴミ拾い」¹である。

明治維新から昭和の終わりまで、日本はジェットコースターのように急勾配を駆け上がっていった。人口・生活水準・進学率・寿命・GDPがうなぎ上りの時代である。そこには、巨大なWANT(欠如・欲求)が存在した。明治の日本において、電気・水道・ガス・鉄道・郵便・銀行・学校・病院等々、これら西洋的な生活基盤は、まずはWANT(欠如)として現れる。「この欠如を埋めよ」という国民的WANT(欲求)に応えるべく、明治国家は近代的なインフラ整備を全国で行ったのである。国民的な欠如・欲求がある時代、すなわち、何らかの重要な存在の「有無」が問題となる時代、これを「WANTの時代」と呼ぼう。そこでは、国民=国家が一丸となって、巨大なWANTを埋め、無を有に変えるべく、奮闘努力するのである。こうした構図は、戦後も一貫して続いていく。東海道・山陽新幹線の「有無」、東名・名神高速道路の「有無」は、確かに高度経済成長にとって死活的重要性をもっていた。同じく、冷蔵庫・洗濯機・テレビ(3種の神器)、カー・クーラー・カラーテレビ(3C)もまた、生活者にとってその「有無」こそが大事だったのである。これが「WANTの時代」、土建国家と少品種大量生産の時代、マスとスピードの時代である。

だが、時は確かに流れていった。「大阪万博(70年)」を成功させ、「沖縄返還(72年)」を果たし、「Japan as NO.1(79年)」を誇ってバブルに浮かれる国民には、かつてのような巨大なWANTは存在しない。もはや「一億総中流」であ

る。一丸となって邁進すべき「国民的課題」など見当たるはずがない。重力は、圧倒的に軽くなった。これが昭和の終わり、平成の始まりではなかったか。もはや、「国民」へと一元的に回収されることはなく、価値観もレジャーも多様化した。平成には、未就学児から後期高齢者までが歌える「国民的ヒット曲」などは存在しないのである。にもかかわらず、大晦日の「国民的歌唱番組」は、あの手この手と迷走しながら、実にしぶとく継続していく。ここに、平成という時代が象徴されているのではなかろうか。平成とは、「惰性・慣性の時代」である。

明治から昭和の終わりまで、さまざまな数値が急上昇を続ける近代化の時代、その推進力は「WANTを埋めよ」という国民的エネルギーにあった。それが失われ、上を向いたジェットコースターの速度は弱まり、これまでの慣性だけで坂の頂点を越えていく。そうした過渡期・移行期が平成ではあるまいか。近代の推進力、「より多く、より速く、より遠くへ」というスローガンは現実味と有効性を失った。だが、新たな理念、新たな生のスタイルを見出すことができない。よって、これまでの近代的な思考が、惰性的に継続するのである。症例はいたるところに見いだせよう。「オリンピック・万博・新幹線」の成功体験から逃れられず、政治家は露骨にこれを「オリンピック・万博・リニア」として反復する。コロナ禍でのオリンピックは、国論を二分しつつ強行された。結果、昭和的なあまりに昭和的な汚職が明らかとなる。現在、万博もリニアも成立が危ぶまれているが、撤退する気配はない。だからと続く惰性・慣性、これが平成すなわち失われた30年ではなかろうか。大規模イベントや高速交通路の設置で経済成長を図る、こうした思考のあり方自体が、いま、問いただされるべきであろう。そのための精神的なインフラは整っている。というのも、いまは、急上昇から急下降へと転じる瞬間、ふわっとした無重力状態なのだから。各自が自由に動けそうな、そんなときなのだから。

さてさて、ではどんな風に、新たな理念、新たな生のスタイルを構築したらよいのか？ むろん、答えは各自で探究すべきである。山の頂は1つで、みなが同じところを目指すにしても、降りていく場所は無限に存在しよう²。

いま、われわれは降りようとしているのである。場所の限定不可能性、無限性、おそらくこれが「山間から『未来』を考える」という本シンポジウムの基本姿勢ではないか（たぶん）。特権的な場所は存在しない。新しさは、東京やパリで生まれるとは限らない。植木枝盛が「土佐の山間から」と言いヴォルテールが「ドイツの森から」と言ったのは（ヨース・ジョエルの論考参照）、もちろん、そこが特権的な場所だったからではない。そこが東京やパリに替わるべきだと考えたからではない。そこに自分たちがいたからである。既成の枠組の外に出ること、東京やパリを無自覚に中心と見なす惰性的な思考から外れること、自分の立ち位置から、自分の頭で考えること、これが「知性」ではなかろうか。知性とは、すべからく「慣性からの撤退」として現れるのである。

1 桜井哲夫『思想としての60年代』ちくま学芸文庫、1993年、35頁

2 広井良典『科学と資本主義の未来—くせめぎ合いの時代—を超えて』東洋経済新報社、2003年、7-9頁